

うめ はら はん じ

梅原半二



梅原半二 (1903 ~ 1989)

出典：『創造限りなく』1987

1935年、トヨタA1型試作乗用車でクルマづくりの出発点に立った豊田喜一郎は、抜山四郎教授を訪ね、教え子の就職を依頼した。抜山教授は、飛び抜けた秀才として大学を去っていた梅原半二を紹介した。1936年、豊田は抜山推薦の梅原をトヨタ自動車工業の前身、(株)豊田自動織機製作所自動車部の嘱託技術者として採用した。梅原は、東京研究所に勤務し、ラジエータの研究を担当した。しかしこの時、梅原の結核が再発したため、豊田は梅原に東北大学の抜山教授の下で熱伝導・ラジエータ研究を継続させた。豊田の思いやりのある取り計らいに梅原は大いに恩義を感じたであろう事は、豊田の乗用車づくりの志に共鳴した梅原の働きが示している。しかし、その本格化は戦後を待つことになる。

■豊田喜一郎の遺志を継ぐ

1945年、梅原半二は「熱交換器の研究」で工学博士の学位を受ける。1947年、梅原は戦後わが国初の本格的な小型乗



TQCを推進する梅原半二

出典：『平凡の中の非凡』

技術無き工学は空虚、工学無き技術は盲目

—品質のトヨタの基礎を築く—

■若き日の秀才

梅原半二は、1903(明治36)年、味噌醤油醸造業「米沢屋」、梅原半兵衛の三男として知多郡内海町(現南知多町)で生まれた。愛知一中(現旭丘高)を経て第八高等学校(八高)に合格した。1920年、東京帝国大学の入学試験は体調不良のため失敗し、後に補欠募集のあった東北帝国大学工学部機械科に入学した。

梅原は在学中、下宿先の魚問屋の石川万兵衛の四女千代子と何時しか恋仲になり、結婚した。1925年、二人共に結核に罹患しながらも、後に哲学者になる梅原猛が誕生したが、まだ学業途上であると実家から結婚に対して大反対に遭った上に、千代子は1926年に病没してしまった。

梅原は大学を卒業し、以後約二年間、断腸の思いを抱えて療養、この間に後にトヨタ自動車入りの遠因ともなる遠藤庄蔵の長女トモと再婚した。

1928(昭和3)年、梅原は病から回復し、東北帝大の講師に就任、抜山四郎教授の下で熱伝導の研究に従事した。しかし、大学を辞し、妻トモが経営するバーのマスターとして働くなど、様々な想いを抱えた生活を送っていた。

■豊田喜一郎に見込まれてトヨタ自動車で再起



初代クラウンの開発を陣頭指揮した梅原半二

出典：『平凡の中の非凡』

アメリカを参考に品質管理手法を研究し、SQC(統計的品質管理)の手法を導入していく。1950年、労働争議で経営難となったトヨタは自工と自販に分離、同時に梅原は取締役役に昇格した。

1952年3月、豊田喜一郎が社長に復帰内定するが急逝した。豊田の遺志を継ぎ、梅原は技術担当重役として初代クラウン開発を陣頭指揮した。1957年、同様に初代コロナの開発を陣頭指揮した。1960年、梅原は常務取締役となり、技術部門(量産車開発担当)と品質保証部門を統括した。

1960年、豊田中央研究所創設のため建設委員長に就任、この頃、副社長豊田英二と共に全社的品質管理法(TQC:Total Quality Control)を推進し、1965年、トヨタはデミング賞を初受賞した。「品質は自工程で造り込む」や「総員参加によるQC」などトヨタらしく、TQCは後にToyota Quality Controlと読み替えられた。1967年、梅原は豊田中央研究所第二代所長に就任した。

(八田健一郎)